

戦国城館の庭園遺構

はじめに 文化遺産部遺跡整備研究室では、2011年度からの中期計画において中世庭園の研究を進めており、これまで「鎌倉時代の庭園」「禅宗寺院の庭園」「室町時代の将軍の庭園」を各年の研究テーマとし、研究会を開催してきた。2014年度は「戦国時代の城館の庭園」に取り組み、10月25日に研究会を開催した。

戦国時代の庭園には現存するものが少ない。そのため、一乗谷朝倉氏遺跡の庭園群の発掘調査をはじめ、城館跡の発掘調査が進展するにともない、庭園遺構の検出事例が増え、その遺構解釈として研究が重ねられてきた。近年は、各地の城館跡の整備事業を契機に、庭園遺構を含む空間の復元整備の過程において、庭園遺構の細部や、建物と庭園からなる空間の構成の具体像に迫る研究が実施されてきている。一方で、発掘調査による遺構の検討という特殊性から、建築史や庭園史における通史的な時代の研究は途上であり、先行して考古学の分野において、体系的な研究が試みられている。

中でも小野正敏氏の研究が、中世城館の空間構成について明解な考え方を示すものとして、広く参照されている¹⁾。小野氏は、一乗谷朝倉氏遺跡義景館に関する発掘調査成果と将軍御成の記事から、館におけるハレの空間が、「表」と「奥」のふたつの意識・原理から構成されることを指摘し、庭園はこのうちの奥の空間を統合する装置であると位置づけた。さらに、「洛中洛外図屏風」(旧町田本)に描かれた将軍邸・管領邸・典厩邸の描かれ方の差異に、戦国の屋敷の規範性と格式の存在を読み取り、屋敷や庭園が格式をそのまま表すステータスシンボルとして機能していたと指摘している。

研究会の開催 当研究会は、様々な分野の研究者による多様な視点から庭園について幅広く検討し、分野を越えた研究状況の共有や意見交換することを、開催目的の一つとしている。2014年度は、庭園史・造園学、建築史、文化史、美術史の研究者のほか、庭園遺構の発掘調査担当者の参加を得た。また、当研究会開催にあたり、参考資料集「中世城館の庭園遺構集成」として、発掘調査によって確認された庭園遺構の一覧を作成するとともに、そのうち59の庭園遺構について遺構集成を作成した。

研究会の前半では、庭園史・建築史・文献史の各分野から研究発表をおこなった。はじめに筆者が、「戦国城館の庭園遺構」と題し、これまでの研究状況の概況を述べ、小野氏の示す空間構成原理の検証として、これによって解釈できる例(江馬氏下館、高梨氏館、吉川元春館、隈部館等)から、戦国時代の空間構成の規範化が看取されることを追認した。一方で、これを逸脱する遺構について、治水・生活用水の確保等、「城」特有の立地条件からの観点で整理が必要であることを示した。また、意匠上の類似性に注目し、朝倉氏義景館の庭園のように、大石による立体的な石組と端正な池を建物に近接して配置する一群と、建物規模に比べてより広い屋外空間を中島のある池庭が占める構成とする一群があることを指摘した。

家塚智子氏(文化史:宇治市源氏物語ミュージアム)の発表「室町文化の地方伝播」では、戦国武将の文化受容の具体例として、播磨国守護赤松氏やその被官在田氏と、冷泉為広との文芸を通じた交流について、古文書等の記載を手がかりに検討された。その上で『君台観左右帳記』の伝授の有り様にも通じる「文化と経済の交換」が各地の戦国武士と公家と間でおこなわれ、これと同時に都の文化が各地に広がっていったとの見解が示された。

藤田盟児氏(建築史:広島国際大学)の発表「住宅史からみた戦国城館」では、近年の住宅史研究を踏まえた中世における「会所」と「主殿」の通史的な展開が示された。その上で、16世紀後半に会所が消滅したのは、会所が主殿に取り込まれたためではないかとし、この中世の主殿を継承して、近世武家住宅の接客座敷である主殿・広間・書院が誕生したとする見解が示された。

後半は、近年庭園遺構が検出された遺跡の発掘調査担当者が事例報告をおこなった。丸尾弘介氏(考古学:山口市教育委員会)からは、「大内氏館跡」の調査で確認された1号庭園から4号庭園までの検出状況について報告があった。一つの方形居館において複数の庭園遺構が確認されているところに、この遺跡の特徴がある。質疑では、各庭園遺構の併存関係や材料や意匠状の共通性について、また2号庭園の池・中島の構造について質問があった。

佐々木健策氏(考古学:小田原市文化財課)からは、2014年度も調査中である「史跡小田原城跡 御用米曲輪検出の庭園について」の報告があった。御用米曲輪は、江戸幕府の蔵「百間蔵」が置かれたことに由来する曲輪で、16

世紀後半の庭園跡と考えられる2つの池と切石敷遺構が確認されている。質疑では、1,200点ほどの石塔の部材を護岸に利用した2号池をはじめ、切石を多用する遺構の造形的評価について質問が集中した。

井川祥子氏（考古学：岐阜市教育会）からは、「岐阜城織田信長居館跡」として、金華山麓に営まれた織田信長居館跡の4地区で確認された庭園遺構の検出状況について報告があった。庭園遺構の背景となる露出した自然の岩盤や、居館跡の中心を流れる谷川が、人工的に成形・造形されていることから、庭園が周辺環境と結びついて一体的な景観を構成しているのではないかという見解が示された。

これらの事例報告に加えて、研究会の参加者であった五十川雄也氏（考古学：大分市教育委員会）から、大友氏館庭園跡における池庭の検出状況について報告があり、砂地の地盤に構築された池の構造などに対する質疑がなされた。

以上の発表・報告を踏まえ、総合討議をおこなった。討議のはじめには、昨年度の研究会でも課題にあげられた、都の文化の地方伝播について議論がなされた。水野裕史氏（美術史：熊本大学）から、都の文化の地方伝播については、禅僧に注視する必要があることが指摘され、家塚氏から禅僧や連歌師について補足がされた。また水野氏から、公家の美意識に対して武家のこだわりというべき美意識の発露や、「和漢」の区別が庭園においてみられるのかどうか、という疑問が示された。これに、尼崎博正氏（庭園史：京都造形芸術大学）からは、室礼における「和漢」のような区別は、庭園に関しては記録上もみられないため解釈することができないとの意見があり、空間構成と意匠上の類似性があるとすれば、作庭に関わる人の交流の中に様式的な伝播の糸口を見出すべきではないかとの指摘があった。また溝口正人氏（建築史：名古屋市立大学）からは、鎌倉時代より前は一元的に都から文化を地方に持ち帰っていたが、鎌倉時代以降は禅寺が地方で造られるなど参照すべきものが地方にもあり、京都の文化は相対化されてきているため、一元的な理解は成り立たないとの指摘があった。

続いて、室町時代の庭園史の通史的な理解において留意すべきことについて、議論が展開した。藤田盟児氏からは、「ハレ／ケ」「表／奥」という公家文化に由来する



図54 研究会の様子

空間構成概念をどの程度、武家の居館にあてはめることができるのか検討する必要があることが指摘された。また、建築史や美術史では、1530年代前後に意匠的な画期がみられ、同様に庭園でも織豊期の庭園の展開を捉えることができないのか、との疑問が示された。尼崎氏からは、庭園においては治水などの立地条件による必然性とそれらの施設の意匠化の両側面を丁寧に押さえること、さらに作庭した人物の生活環境、意図などを含めて、様々な庭があり得ることを認識する必要がある、との提言があった。

最後に、小田原城跡御用米曲輪検出の庭園遺構の解釈について議論があった。飛田範夫氏（庭園史：元長岡造形大学）から切石を用いる作庭の担い手を考えることが必要であるとの見解が示された。その後、各参加者から貯水池としての機能性とこれを意匠化する際の造形の程度、作庭の担い手として石工が関わった可能性について意見が交わされた。

まとめ 今回の研究会で、戦国時代の文化が地方に多元的に展開していることを前提に、特に立地的な必然性、作庭の担い手に注意しつつ、美術史・建築史で捉えられるような転換期が庭園史においてもみられるのかどうか、検討していく必要があることが確認された。また、観賞本位の狭義の「庭園」に限らず、城館における空間を荘厳化・意匠化する場合があり、遺構解釈ではこのことを踏まえて、空間を評価する必要があることが示唆された。

（高橋知奈津）

註

- 1) 小野正敏「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』46-3、1994。